

森とともに生きて……ヤマにやどる神と仏

松田 度^{わたる} (大淀町教育委員会)

世にいう邪馬台国の時代
大和盆地には山(ヤマ)のように
大きな墓(墳丘墓)が誕生しました。
ヤマとは、世を去った王・首長たちの霊がカミとなり
やどる場所だったので。



写真1 三輪山(桜井市・井寺池付近より)

日本列島に農耕社会がひろがり、世の中が「クニ」としてのまとまりを求め始めた3世紀(世にいう邪馬台国の時代)のことです。大和盆地には山(ヤマ)のように大きな墓(墳丘墓)が誕生し、それが箸墓(箸中山)古墳に象徴される巨大墳墓の時代への序章となりました。

これ以降、クニの政治を担った王たちは、平地につくった巨大な人工のヤマ(古墳)へ葬られるようになりますが、日本列島の各地域でもヤマの高所地(山上あるいは山中)へ歴代の首長たちを葬るようになります。両者に共通するのは、世を去った王・首長たちの霊(魂)はカミとなりヤマの世界に

た。また、三輪山の祭祀をつかさどった三輪氏の祖先神・オオモノヌシ(オオナムチの別称とされます)が大神社の主祭神となっていることは、このヤマの特色といえます。日本の神道(カミまつり)は、このように祖霊への畏怖とともに仰ぎみるヤマへの信仰が基層の一部をなしていると考えてよいでしょう。

神体山への信仰が深まる中で、平城京の時代(8世紀)には、仏教寺院がヤマの高所に築かれます(これを山岳・山林寺院と呼んでいます)。大和

盆地と吉野・宇陀地域の境界にそびえる竜門岳(標高904m)を例にとれば、名瀑「竜門の滝」(写真2)をともしなう神仙の霊山としてその中腹に建立された山岳寺院・竜門寺に、数多くの貴人・修行者が訪れています。ここにも、神仏を問わずヤマを聖地にみてる考え方がうかがえます。

この考えは、8世紀以降、吉野の山中で仏教(密教)との融合が進み、山中で修行をおこない目にみえない力(験)を得る、あるいは登拝したあかしをヤマに納める信仰(納経)へとつながってゆきます。吉野・大峯を縦走した修験者(山伏)たちの信仰にも、ヤマにやどる神仏への畏怖(おそれ)と憧憬(あこがれ)をうかがうことができます。

現在は、ヤマをトレッキングする人々が増えるにつれ、ヤマに畏怖の念を抱いたり、神や仏といった非科学的な存在を想起する機会は少なくなっています。しかし、人と自然とが共生する世界に想いをめぐらすとき、ときには、古代の人々や山伏のような志でヤマと向き合うことも必要なのではないのでしょうか。

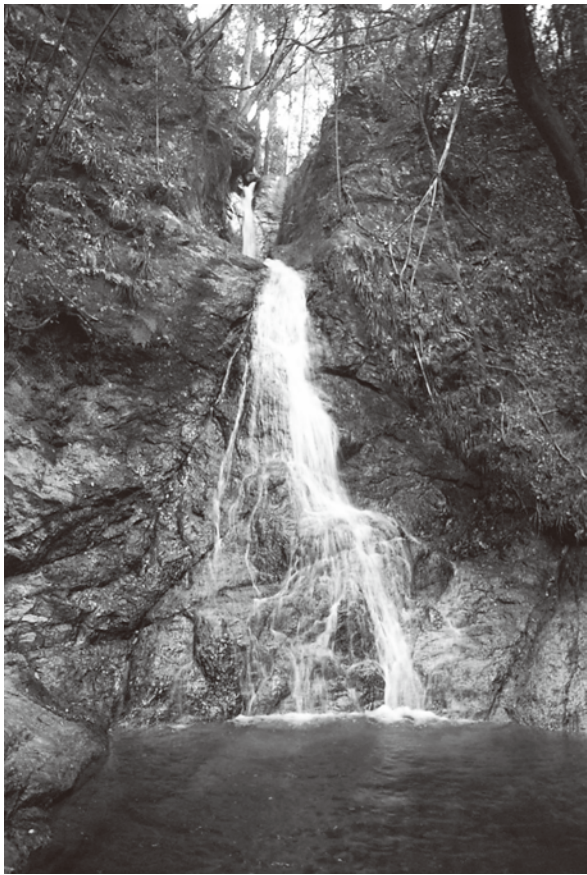


写真2 竜門の滝(吉野町)

参考文献

- 宮家準『修験道 山伏の歴史と思想』教育社歴史新書〈日本史〉174 教育社 1978年
- 宮坂敏和『吉野―その歴史と伝承―』名著出版1990年
- 松田度「みたての山―高地性古墳とその造営背景について―」『シンポジウム「山と地域文化を考える」資料集』2005年
- 前田晴人『三輪山―日本国創成神の原像―』学生社 2006年